

## わが国における旧帝国博物館の成立過程

### The Development of the Imperial Museums in Modern Japan

永 野 光 一      水 野 信 太 郎  
Koichi              NAGANO      Shintaro              MIZUNO

#### I は じ め に

本稿は、わが国の近代に成立した旧帝国博物館に関する主として博物館学ならびに建築史的な研究の考察である。なお帝国博物館という名称は、今日ならば国立博物館に相当する概念であった。西洋史で近代と位置付けられる時代区分は、中世キリスト教社会の終焉以降、現在に至るまでの時期である。具体的には 13 世紀末から 15 世紀の文芸復興（ルネサンス）と、その直後の 16 世紀におこった宗教改革の時代から、20 世紀までを含む。

これに対して日本の近代とは、江戸時代末から明治・大正そして昭和期の前半までを指す。江戸時代の末とは、日本がアメリカ合衆国をはじめとする西洋諸国に対して開国した安政元（1854）年から後の、いわゆる幕末期をいう。また昭和前半とは第二次世界大戦が終結した昭和 20（1945）年以前の時期を意味する。それ以降、現在にいたる 54 年間を今のところ「現代」と区分している。けれども、この「現代」もすでに半世紀を経過しており、やがて遠くない未来において時代区分の再考が提案される可能性が考えられる。

ところで日本の近代において博物館が整備されてきた歴史をかえりみると、それらの施設の設置主体は大半が官主導型であった。明治・大正時代の官主導という場合、官とは国家・政府そのものである。今日では博物館に限らず、さまざまな機関・諸施設の設立形態としては大きく分けて国立、公立、私立という 3 種類がある。けれども第二次世界大戦以前のわが国においては、官と民という意識は強く存在したものの、公すなわち今日の都道府県や市町村という地方公共団体に対しては、一部の地方を除いて、高度な認識があったわけではない。地方自治や地方分権への理解は、まだ芽生えていない時代であった。

博物館の設置者として個人が最初に登場するのは、大倉喜八郎が収集した東洋美術品を公開した大倉集古館<sup>1)</sup>からである。日本の私立博物館第 1 号である大倉集古館は、大正 8（1919）年に設置されて、現在にいたっている。

さて日本近代における博物館の主流であった官立博物館だが、その内容は一様でなかった。現代でも博物館の収集・分類・保存・展示・公開・調査・研究分野には、おおむね自然科学系の内容と人文科学的なものの二通りがある。自然科学系の内容とは、言い換えれば理科系の分野で、動物・植物・鉱物などの標本を揃えることから始まる。これに対してもう一方の人文科学的内容は、一般的な意味での文科系領域で、文化史や文芸・芸術作品などを扱っている。わ

が国で明治時代に設置された博物館のうち自然科学系博物館は、近代的な科学と技術を広く普及させ国民全般を教育する目的から新たに置かれた。そして同じく初期の人文科学系博物館は、わが国固有の歴史と美術品などの文化財を保管すると共に展示するための施設であった。

## II 研究の目的と意義

本研究の目的は、わが国明治以降の近代的西欧式博物館の淵源と、その発展過程を明らかにすることである。日本の近代的な博物館の芽生えは、前述の通り官立の自然科学系ならびに人文科学系博物館であった。その後の変遷は国立・公立・私立という三者が設置主体として加わる歴史であり、収集展示研究分野の多様化であったと言える。そのような流れの中で、中心的存在であった帝国博物館の特徴を詳らかにする。同時にそれらの成立過程・建設過程を確認することを研究の目的とする。このように日本近代における博物館のあゆみを振り返ることで、わが国の博物館施設が内包する長所や短所を明らかにできるのではなかろうか。また日本的な博物館の特徴を鑑みた上で、わが国のみならず世界における将来の博物館のあるべき姿を浮き彫りにするねらいもある。更に 21 世紀以降、新たな博物館の建設構想を立案する際、本研究の成果を指針のひとつに加えることができれば、研究の意義も見出すことができると考える。

わが国近現代の博物館や博物館相当施設の全体像を概観できる文献として、講談社から昭和 50 年代に出版された『日本の博物館』全 13 巻というカラー印刷による大版の写真集がある。それらの内容は、『日本の博物館第 1 巻 日本美の伝統 [三大国立博物館]』から『日本の博物館第 13 巻 産業の発達史 [企業博物館]』までを網羅している。それらのうち特に博物館施設としての建築物を詳細に記述しているのは、『日本の博物館第 6 巻 絢爛たる武家文化[城の博物館]<sup>2)</sup>』や『日本の博物館第 7 巻 明治のたたずまい [博物館 明治村]<sup>3)</sup>』などである。だが東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館の旧帝国博物館に関して、博物館学や建築史学の視点から当初の計画要素や設計手法を総合的に論じた研究はいまだに少ない。

## III 研究の方法

本研究では下記にまとめるような 3 種の調査研究方法をとる。具体的に列記すると

- ① 旧帝国博物館をリストアップする原典として『明治大正建築写真聚覧』を採用する。
- ② 上記以外の日本近代建築史研究書をひもとくことにより得られる事実を積み上げる。
- ③ 筆者の一人が当該博物館へ実際に赴いて知り得た新たな事項をも加えるものとする。

の 3 点である。最初の項目は、昭和 11 年に現在の社団法人日本建築学会の前身である建築學會が発行した『明治大正建築写真聚覧』という建築写真集を基本的文献資料とするものである。この書籍には明治元年から大正 15 年までに竣工した建築物 250 点が掲載されている。それらの総数は必ずしも 250 棟と限らない。理由は各葉の写真に多数の建築作品が含まれるものがあったためである。なお本稿に再録する写真は、すべて同書からの転載による。

また先の 250 点の選択基準については、下記のような記述がある。

- 1 其の時代を代表すること
- 2 社会的に著名なこと
- 3 建築的に特徴あること
- 4 建築界に由緒深きこと
- 5 廣く設計者を網羅すること<sup>4)</sup>

日本近代建築史の研究書としては、設計に携わった建築家ごと、建築物の用途ごと、そして当該建築作品が現存する地方ごとなどにまとめて記述している文献が少なくない。

#### IV 教育博物館

以下に、かつての帝国博物館を建設順に見ていく。最初の建築物は教育博物館(写真1 参照)である。この日本最初期の博物館は、明治10(1877)年1月に東京上野の西四軒寺跡(現東京芸術大学構内)に竣工<sup>5)</sup>した。同博物館は官設による博物館で、その内容は当初は自然科学だけでなく授業方法や商業教育の分野も含んでいた。学校教育のためには博物館が必要であるという考え方に従って設置された経緯をもつ。教育博物館は明治14(1881)年7月に東京教育博物館と改称され、この時に手島精一が館長となり、以来急速に自然科学専門の博物館へと変化する。これが今日の国立科学博物館の前身にあたる組織・施設である。

写真から知ることのできる事項は、おそらく木造建築で2階建、外壁を白漆喰で仕上げ、出隅部分にコーナー・ストーン<sup>6)</sup>の意匠を施している点である。コーナー・ストーンは実物の石材

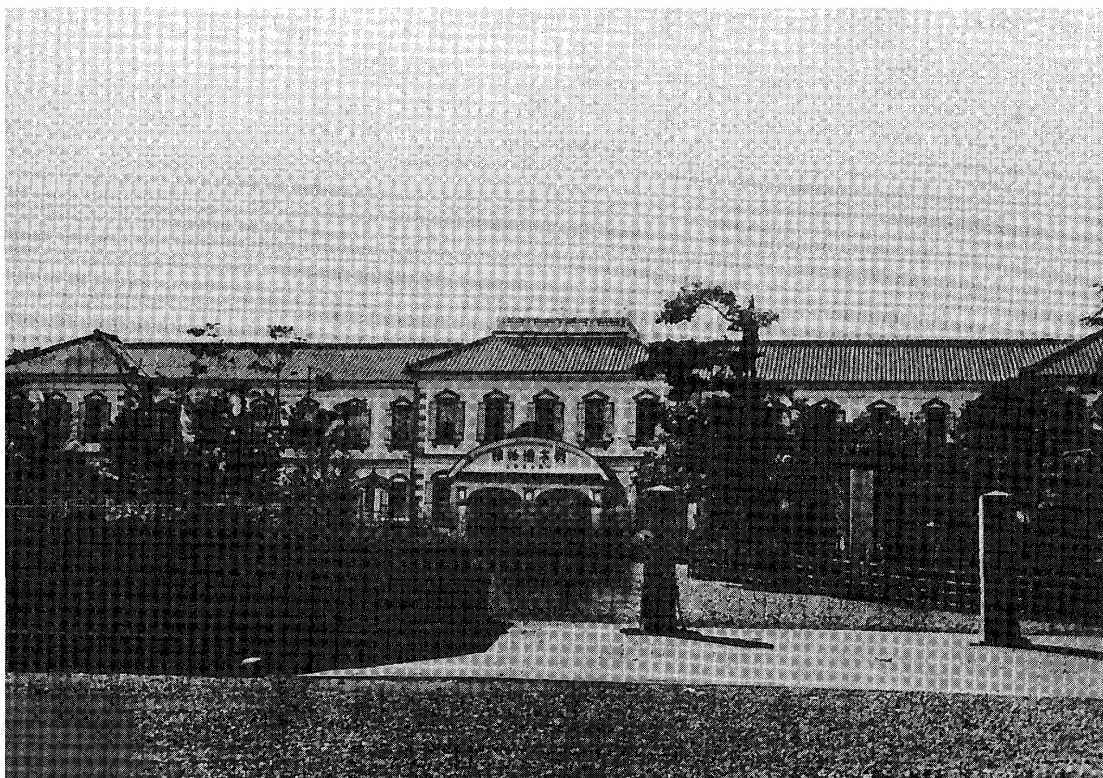


写真1 教育博物館

が使われるとは限らず、顔料を混ぜた漆喰で左官工事をする場合が多かった。出入口上部には、右から左方向に特殊な書体の切り文字を並べた“教育博物館”の看板が見える。下の段には小さな6つの文字があり、“明治十年竣工”ではないかと見られる。設計者と施工者の名は不明である。

現在、上野公園7に位置する国立科学博物館の本館（旧館）は写真1の建物ではなく、場所も移っている。同博物館は、昭和5（1931）年に新築されたS.R.C.3階建、地下1階、塔屋（ペントハウス）付きの近代建築である。S.R.C.とはSteel Reinforced Concrete Constructionのイニシャルで、鉄骨鉄筋コンクリート構造を意味する英語の頭文字・省略形である。Reinforced Concreteは補強されたコンクリートすなわち鉄筋コンクリートである。

国立科学博物館は震災復興事業による。このような事情は、東京における昭和初年新築の建築物には多い。この時期の近代建築の大半が、外装にスクラッチ・タイルを採用している。この博物館も例外ではなく、外観に引っ掻き傷のあるスクラッチ・タイルを貼っている。

現国立科学博物館の平面計画の全体像は、航空機の輪郭をしている。玄関車寄が飛行機の先端で、正面を構成する棟が主翼部分、JR上野駅側の東棟が尾翼に位置する。正面と東棟を結ぶ中央の軸が、航空機の胴体にあたる。この建物が計画された当時には、飛行機が科学の最先端を象徴する存在であったことが窺われる。この博物館に関しては次のような記述もある。

明治5年本郷湯島に発祥した教育博物館の後身である。建築当時は東京科学博物館と呼ばれた。鉄骨鉄筋コンクリート造、地上3、地下1、延2600坪、内陳列室1000坪。現在陳列室には、地学、動物学、植物学、理化学、工学、天文学の出陳がある。<sup>6)</sup>

上の記述では教育博物館のルーツは湯島の地で明治5（1872）年に開設されている。すると写真1の明治10年竣工の洋風建築は、少なくとも2代目以降の施設であることになる。

## V 上野博物館

冒頭で帝国という名称は、今日ならば国立に相当すると述べた。官立を意味する帝国・帝國、あるいは皇室を思いおこさせる帝室の博物館として最初に整備された施設が上野博物館（写真2参照）である。場所は東京上野、明治11年4月起工、同14年第2回内国勸業博覧会の臨時美術館となり、閉会後工事を再開して明治15年4月に竣工した。工部省営繕局の設計監督、設計者コンドル、現場主任は技手立川知方であつた。<sup>7)</sup>立川は旧幕時代より建築業に従事し、工部省設置以来奉職して敏腕を振つた。<sup>8)</sup>コンドルは本館設計に当り、東洋風を加味することを試み、印度サラセニック式を用いた。<sup>9)</sup>大正大震災に壊滅した、<sup>10)</sup>という。上野博物館以下、本稿で扱う施設はすべて美術館とも呼ぶことのできる文系の博物館である。

設計者ジョサイア・コンドル（Josiah Conder 1852-1920）はイギリスの若き優秀な建築家であったが、25歳で来日。<sup>11)</sup>工部大学校造家（ぞうか）学科ただ一人の教授として、わが国で最初の正規の建築教育を始めた。その結果、いまでも東京大学工学部建築学科の父とされている。彼は教育者のみならず建築家としても活躍し、明治16（1883）年に竣工した鹿鳴館の設計者と

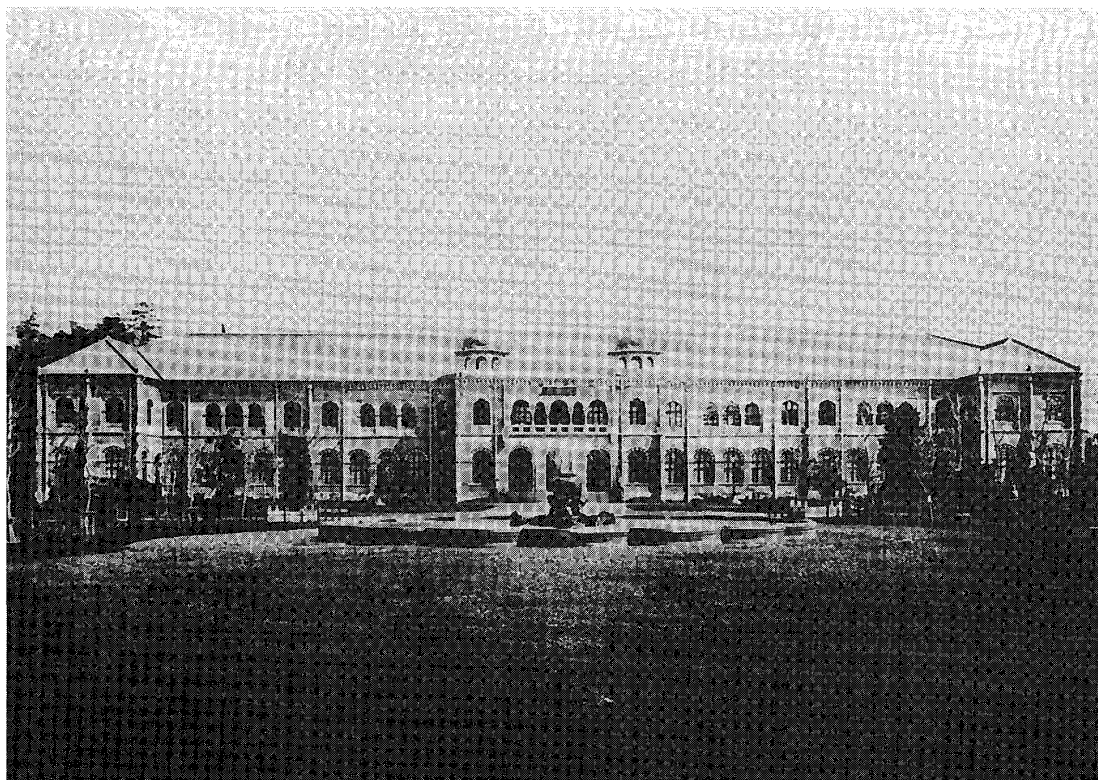


写真 2 上野博物館

して名高い。また日本画の研究者でもあった。日本人の妻を娶り、日本で死に、日本で葬られた。日本文化への深い理解を持つ英国紳士であった。

そのコンドルが設計した上野博物館は、ヨーロッパ式のスタイルではない。イスラム様式である。来日後しばらくの時期、彼が手掛ける作品にはサラセン的な意匠が目立った。その理由は、東洋への非常に強い憧れをもつコンドルが、西洋建築と日本建築を結ぶ形としてインド・アラビアの建築様式を積極的に採用したからである。彼の意識の中には西洋と東洋の中間に、イスラム圏があった。西洋人であるコンドルの感覚で、東洋の中国・朝鮮・日本の微妙な違いを真に理解できたか否か、それは不明である。彼は、もっとグローバルなスケールで、世界のあらゆるデザインをこなしてみたかったのであろう。

明治 14 (1881) 年、東京箱崎に建てられた開拓使物産売捌所本館<sup>12)</sup>も同様のスタイルをとっている。この施設は北海道産の物品を陳列して販売し北海道への理解を求める目的で、開拓使が新築した。開拓使は、今日の北海道開発庁と北海道庁を合わせたような機能を有していた。物産売捌所は、函館湾岸の茂辺地（もへじ）で焼いた煉瓦を東京まで船で運び、現場で積み上げて建築された。外観に赤煉瓦を顕にした建築で、後には日本銀行本店として使用された。

当時のインドないしサラセン様式を、世界史の中で概観した記述がある。

西欧文明の東漸 16 世紀以后インドの宮殿には欧洲風の建築様式の基本の上に細部装飾等デザイン固有の好みを加えた一種の折衷式を形成し、独特のインド様式が出来上ったのであるが、石を主とするメイソンリイ構法である点には変わりなく、細部手法もイスラム系を

とり入れて変化の多様を示す程度。すべて、インド風に装飾し、17世紀前半に於ける最美の建築を代表するタージ・マハールにしても、ムガル帝国の建設者フマユーンの廟にしても、デリーのジャマーマスジッドにしても、殆んど同じ Composition であって<sup>(ママ)</sup>建築系譜の同一性を物語<sup>13)</sup>る。

メイソンリー構法とは masonry 構造であって、日本語では組積（そせき）式と呼ばれる。かたまり状の素材を下から順に積み上げる方式で、現代では煉瓦造、石造、補強コンクリートブロック造の3種類がある。上記の引用文献は、インドやイスラムと言えども構造的には西洋と同じ手法であり、両者が融合しやすい条件があった点を指摘している。

## VI 帝國奈良博物館

帝國奈良博物館（写真3参照）は奈良市登大路町に現存する。名称は奈良国立博物館に改められた。この博物館が竣工時の名をそのまま使用していた当時の資料には、

設計 工學博士 片山東熊、宗兵藏／施工 清水満之助／起工 明治25年6月19日／竣工 全27年12月19日／工費 90,000圓／關係者 監督者 内匠寮技手、柴田四子吉、全枚良富及雇員 原田七五郎、舟橋喜一、櫻井東一郎、製圖 全技手金子釘藏、佐野昭／敷地 23,662坪／建坪 464坪977／延坪 912坪／高サ 37尺8／階數 平家1部2階／様式 古典式／構造 煉瓦造、とある。<sup>14)</sup>

設計チームの総責任者である片山東熊（かたやま・とうくま 1853-1917<sup>15)</sup>）は工部大学校造家学科におけるコンドル教授の一番弟子（第1回卒業生）の一人である。片山は宮内省内匠寮（たくみりょう）の宮廷建築家として華々しい作品を設計する生涯をおくった。彼の代表作としては帝國奈良博物館（明治27年）、帝國京都博物館（明治28年）、表慶館（明治41年）そして東宮御所（赤坂離宮・迎賓館、明治42年）を挙げることができる。

帝國奈良博物館の仕上材料に関する記述として、「煉瓦造で窓縁には伊豆沢田の青石、其他は伊予大島の花崗石を使つて<sup>(ママ)</sup>いる<sup>16)</sup>」という内容がある。日本の近代建築史において、主として仕上用あるいは時として構造用を含む石材の調査をした時期があった。その内容は石材の所在地、採掘の現況、石材の外観、そして強度などの物理的性質である。それは議院建築すなわち国会議事堂を建設するための調査であった。建築に使用することのできそうな石材を、全国規模でリストアップしたのである。国会議事堂の完成は昭和11（1936）年であるが、建築用石材データ収集の時代は、明治期の後半から大正時代初めであった。その一連の調査結果が、この博物館建築にも部分的に活用されている。

帝國奈良博物館の石材には、正面階段まわりに白御影を用い、外壁の大半を伊豆の青石と呼ばれる凝灰岩の一種である沢田石で仕上げている。沢田石のきめは細かいが、色調は竜山石（たつやまいし）の青さと酷似している。竜山石は兵庫県産の凝灰岩である<sup>17)</sup>。つまり良質な石を遠くから取り寄せているのである。これが石材調査の成果である。

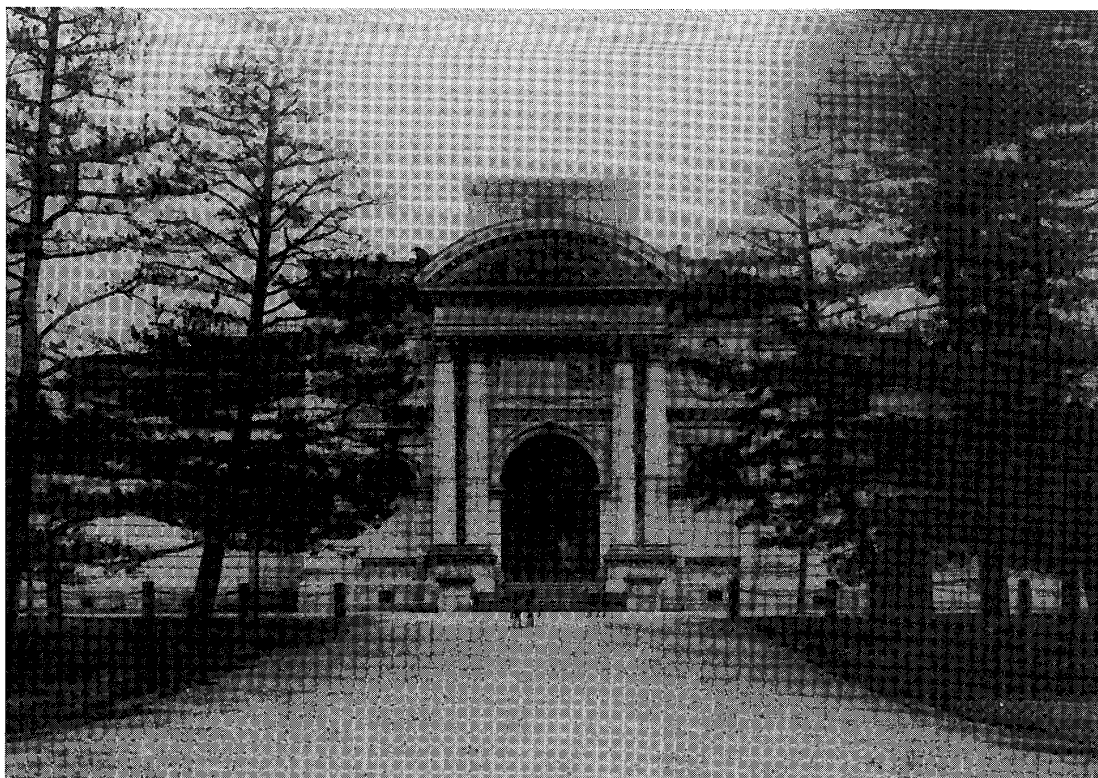


写真 3 帝國奈良博物館

## VII 帝國京都博物館

帝國京都博物館（現京都国立博物館、写真 4 参照）の所在地は、京都市東山区大和大路七条上ル茶屋町で、三十三間堂と道を隔てた隣接地である。同博物館正門<sup>18)</sup>は西側を向いている。

京都国立博物館整備の経緯に関しては、興味深い論考がある。

博物館をどうして宮内省が建てるのか、疑問に感じる向きもあるかもしれない。京都国立博物館、略して京博は今でこそ文部省管轄だが、戦前は帝国京都博物館という名称で宮内省管轄であった。日本最初の博物館は、東京・上野に内務省が開いたものであった。明治十九年（一八八六）、その上野博物館の管理を宮内省は引き受ける。どうやらヨーロッパ各国の王室が文化財保存に尽力していることに触発されたらしい。折りも折り、明治維新以来、存立基盤が不安定になった神社・寺院から仏像、書画など什宝が海外へ大量に流失していた。その防止は国家の体面にもかかわる喫緊の課題であった。国内に権威ある収集機関をつくらねばならない。こうして京都と奈良にも帝国博物館の設置が決まる。明治二二年のことである。<sup>19)</sup>と述べられている。また再び、この建物についても建設工事と建築材料の記述がある。

帝室博物館として片山東熊と内匠寮技手足立鳩吉の設計に成る。明治 25 年 6 月起工同 28 年 10 月竣工。本館建坪 912 坪。煉瓦と伊豆沢田の青石、伊予大島の花崗石で築造した。あたかも明治 24 年濃美震災<sup>(ママ)</sup>のあとであつたので耐震構造には意を用いコンクリートやモルタルは総てセメントを用いた。工事ははじめ日本土木の請負であつたが、途中で手でひき<sup>(ママ)</sup>、後は宮



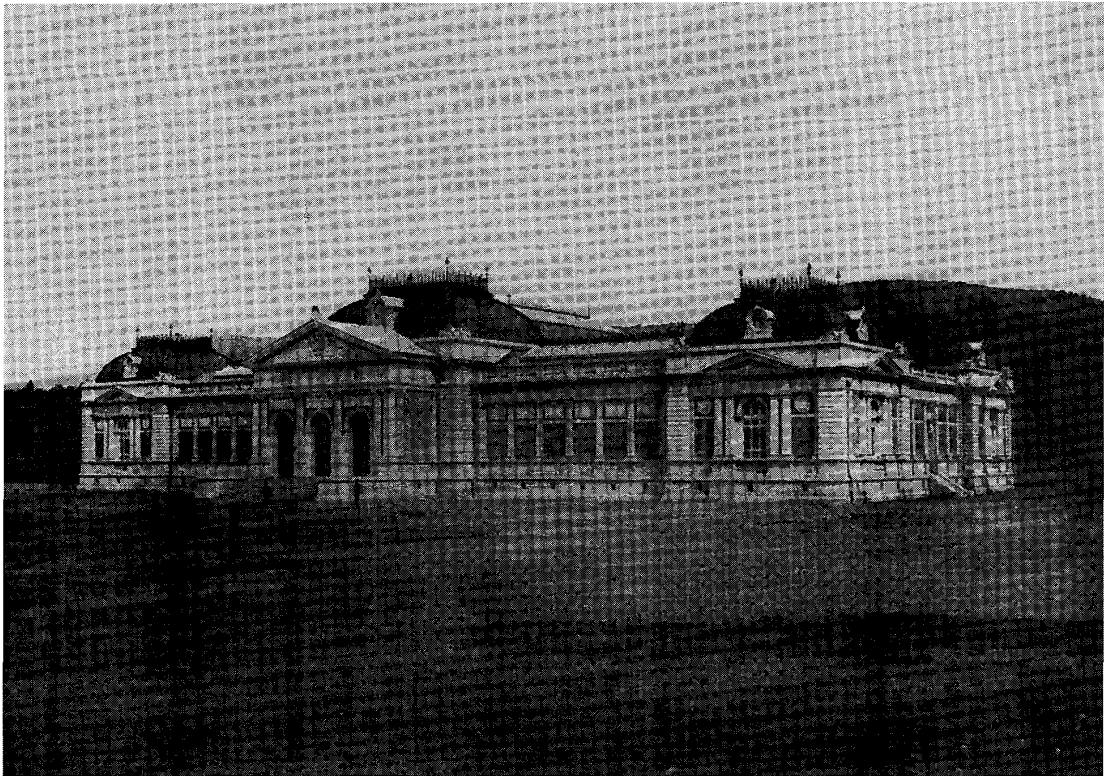


写真4 帝國京都博物館

内省内匠寮の所轄で分業請負となつた。<sup>(ママ)</sup><sup>16)</sup>(後略)

ここでいうコンクリートとは、セメントに砂と砂利と水を混ぜて練った材料である。またモルタルはセメントに砂と水だけを混ぜたものである。そしてセメントは、すべて近代的なポर्टランド・セメントを意味する。ポर्टランドとはイギリス本島南海岸の地名である。近代セメントがイギリス人煉瓦工アスプディンによって焼成された後、その色調がポर्टランド海岸の砂や岩の色に似ていたので、ポर्टランド・セメントと呼ぶようになったといわれる。アスプディンのセメントは、古代ローマ人たちが火山灰を用いた天然セメントに比べて強度が高い。

旧帝國京都博物館の正門に関しては拙稿<sup>20)</sup>がある。その概要を示すと、本館の様式はルネッサンス調であるといわれるが、正門の意匠にはイオニア風柱頭、トスカナ風の柱、ロマネスク式の半円アーチなど実に盛りだくさんのデザインが詰まっている。素材もイギリス積の赤煉瓦、腰の白御影石、竜山石に似るがキメの細かな青石とバラエティーに富んでいる、というものである。なお拙稿では明治期の博物館整備の状況にも触れている。

## VIII 表 慶 館

表慶館(写真5参照)は東京国立博物館の敷地内に建つ本格的西洋建築である。明治41(1908)年竣工で、設計は片山東熊と高山幸次郎、施工側監督は新家孝正(にいのみ・たかまさ)。大正天皇の御成婚記念として寄進された。構造は煉瓦造で、表面に厚い白御影が積まれていると考えられる。関東大震災で本館(コンドル設計の上野博物館)が崩壊した後、新館(現在の東京



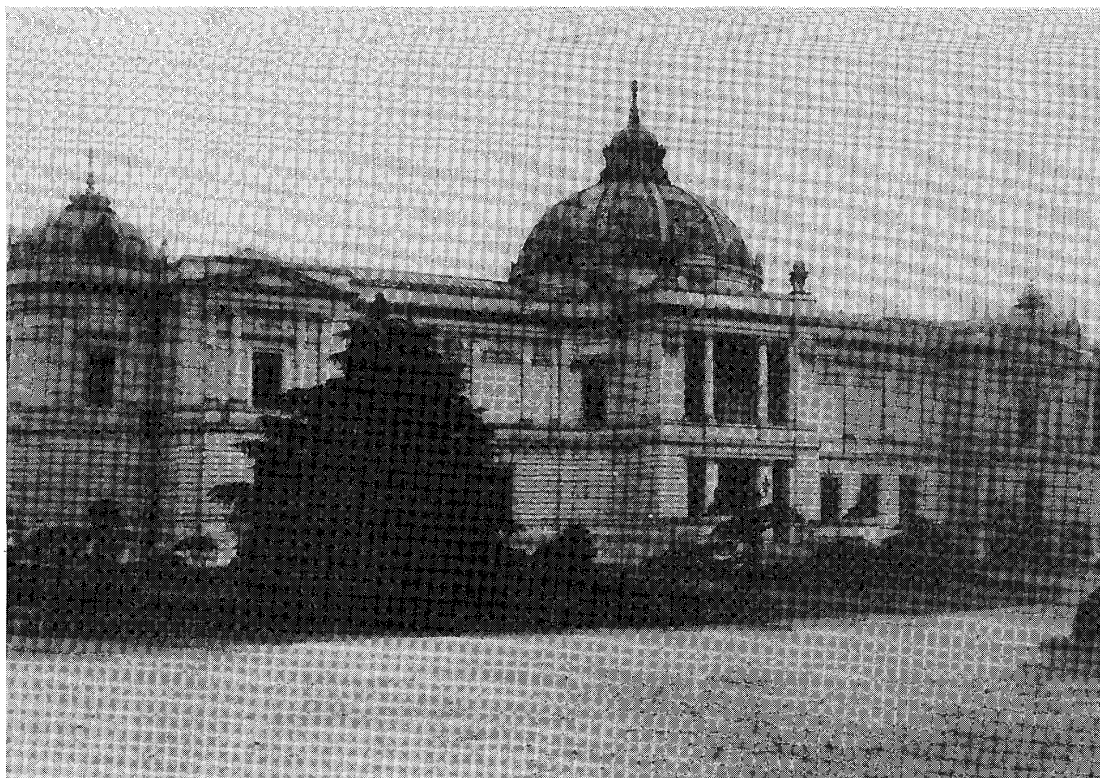


写真5 表慶館

国立博物館）が完成するまで、同博物館としては唯一の展示施設であった。本館に比較すると規模が小さいなど目立たないが、筆者は明治建築としては屈指の作品であると見ている。この建築に関しては蔵田周忠（くらた・ちかただ）による下記のような評価がある。

表慶館 1908 設計 片山東熊，高山幸次郎。監督，新家孝正。東京博物館内に現存。大正天皇東宮時代成婚記念，民間寄進。フレンチ・ルネサンス式の典型。花崗石造，2階建。屋根銅板葺，室内柱，大理石。形，整備，洗練す。ディテールの堅さは日本独特の精緻さを示す。日本銀行と相対<sup>21)</sup>する記念的作品。

## IX 聖徳記念繪畫館

繪畫館（写真6参照）は大正15（1926）年3月，現在の東京都新宿区霞丘7に新設された鉄筋コンクリート構造1階，正面中央部のみ2階，地下1階の美術館建築である。所在地は竣工時には青山に含まれていたが，今も昔も明治神宮の外苑の一角を占めている。繪画館は旧聖徳記念館という名称からも理解できるように，わが国の古代以来の歴史を，大きな絵画によって物語ろうとする施設である。一定間隔で配置された西洋建築式の縦長窓と窓の間を，鉄筋コンクリート造の壁面が構成している。その壁に，日本の神話に題材を得たと思われる絵画を，天井高の高い室内空間いっばいに展示している。

設計者は明治神宮造営局という組織名で記録されているが，デザインの原案は懸賞設計・競技設計・コンペティションに応募して当選した小林政紹の案を採用している。そのような事情

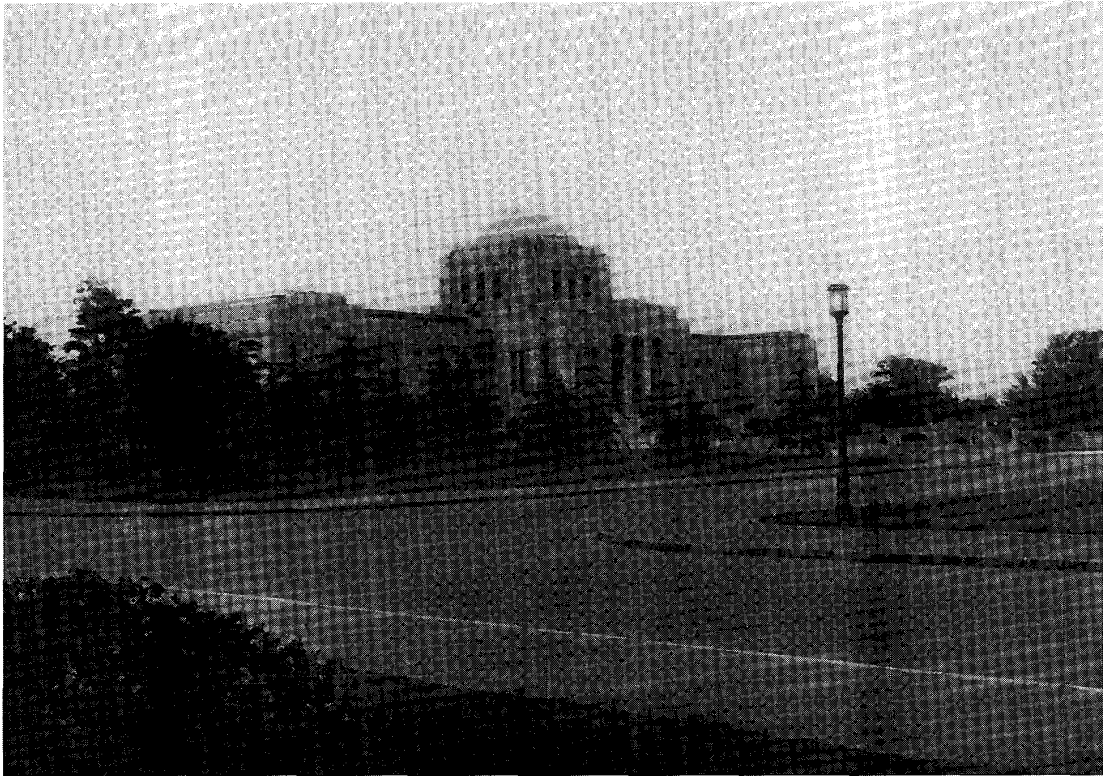


写真 6 聖徳記念繪畫館

から、繪畫館の設計者としては古市公威・小林政紹 2 名の名前が掲げられる場合もある。古市公威（ふるいち・きみたけ）は元来、土木工学の技術者であるが、設計組織の責任者を務めていたものと考えられる。施工は部分ごとに分割して請け負ったようであるが、大倉土木会社が最も重要な箇所を担当した。

## X 東京帝室博物館

コンドルの設計で建てられた煉瓦造の上野博物館が、大正 12 (1923) 年 9 月 1 日の関東大震災によって倒壊する。その跡地・東京都台東区上野公園 13 に新しく建設されたのが旧東京帝室博物館である。この建物の設計は、東京帝室博物館競技設計としてコンペが実施された。その規約として「建築ノ様式ハ内容ト調和ヲ保ツ必要アルヲ以テ、日本趣味ヲ基調トスル東洋趣味<sup>22)</sup>であることが示されていた。つまり明治以来の日本建築界全体にとって大きな命題であった、西洋建築技術と日本建築の伝統をどのような方法によって整合させ得るかという解決策なのである。そのために試みられた手法が、西洋式の壁体に東洋風の勾配をもつ屋根を冠する“日本建築”であった。

東京帝室博物館で、一等に入選する案を提出したのは渡辺仁であった。昭和 6 (1931) 年のことである。渡辺はどのような様式であろうとも、期待通りにこなすことのできた建築家であった。そのような状況の中で、建物は昭和 12 (1937) 年に竣工する。だがこのような社会情勢と建築的潮流に、釈然としない若き建築家たちがいたのも事実である。

「日本的なもの」に対する新しい理解 昭和初期はナショナリズムの台頭などを背景に、「日本的なもの」を表現することが求められた時代でもある。コンペでもそれが求められ、瓦屋根を冠した様式で応えることがしばしば行なわれた。東京帝室博物館（渡辺仁，1937 年）はその典型的なものである。

このようなやり方に対して近代主義建築を奉ずる建築家から批判が出された。彼らはこのような建築の非合理性を糾弾するとともに、彼らの考える「日本的なもの」を主張した。（中略）左右非相称<sup>(ママ)</sup>，無装飾，素材の美の尊重，平面・構造の簡素明快<sup>23)</sup>，などを抽出した。

なお現在の東京国立博物館の建築写真については掲載しなかった。その最も大きな理由は竣工年が昭和 12 年ということで、基本資料とした『明治大正建築寫眞聚覽』に掲載されていないためである。同写真集は明治と大正時代の建築物だけを網羅しているからである。また本稿全体の写真体裁を揃える目的からも、あえて割愛した。東京国立博物館は現存しているし、今回とり挙げた旧帝國博物館の中では最も著名な作品だと言えよう。

## XI む す び

これまで日本近代の博物館として中心的存在であった帝国博物館を個別に見てきた。それらの設立趣旨や設計意図を確認することもできた。ただし、わが国の博物館施設が内包する長所や短所を明らかにするまでは及ばなかった。けれども将来の博物館があるべき姿を明らかにするための示唆は、いくつか盛り込む事ができたように考えている。

末尾になってしまったが、本研究で拠り所とした博物館学、博物館の発達史、近代建築史、建築家論ほかの文献執筆者と研究成果に敬意を表したい。今後は建築仕上材料を見抜く眼力と共に、博物館施設の評価手法も含めた現地踏査の心得を磨きたい。

## XII 参 考 文 献

- 1) 『図解 博物館史』椎名仙卓，雄山閣出版，平成 5 年 3 月 5 日，p.126
- 2) 『日本の博物館第 6 巻 絢爛たる武家文化 [城の博物館]』，岡本良一編，講談社刊，昭和 56 年 1 月 15 日
- 3) 『日本の博物館第 7 巻 明治のたたずまい [博物館 明治村]』，関野克／菊池重郎編，講談社刊，昭和 55 年 11 月 10 日
- 4) 「編纂に就て」，『明治大正建築寫眞聚覽』編輯兼發行人高杉造酒太郎，發行所建築學會，昭和 11 年 12 月 25 日，p.2
- 5) 前掲『図解 博物館史』p.p.70-77
- 6) 『建築百年史』監修者今和次郎，編集者大泉博一郎，建築百年史刊行会，昭和 32 年 2 月 1 日，p.186
- 7) 前掲『建築百年史』p.55
- 8) 『日本近代建築史ノート 西洋館を建てた人々』村松貞次郎，世界書院，昭和 40 年 9 月 1 日，

p.p.307-324

- 9) 『日本の建築 [明治大正昭和] 2 様式の礎』小野木重勝, 三省堂, 昭和 54 年 4 月 15 日, p.168
- 10) 『明治洋風宮廷建築』小野木重勝, 相模書房, 昭和 58 年 12 月 15 日, p.162
- 11) 『お雇い外国人 15 建築・土木』村松貞次郎, 鹿島出版会, 昭和 51 年 3 月 29 日, p.42
- 12) 『ジョサイア・コンドル建築図面集 I』河東義之, 中央公論美術出版, 昭和 55 年 8 月 25 日, p.p.1-7
- 13) 『近代建築史 国際環境における日本近代建築の史的考察』蔵田周忠, 相模書房, 1965 年 3 月 15 日, p.44
- 14) 『近代建築畫譜 近畿篇』近代建築畫譜刊行會, 近代建築畫譜刊行會, 昭和 11 年 9 月 15 日, p.274
- 15) 『近代建築の黎明 明治・大正を建てた人々』神代雄一郎, 美術出版社, 1963 年 7 月 10 日, p.p.35-45
- 16) 前掲『建築百年史』p.90
- 17) 『日本近代における組積造建築の技術史的研究』水野信太郎, 私家版, 昭和 61 年 12 月 20 日, p.483
- 18) 『京都の明治文化財 建築・庭園・史跡』林俊光, 京都府文化財保護基金, 昭和 43 年 5 月 1 日, p.18
- 19) 「白亜の秩序」石田潤一郎, 『モダン・シティー・KYOTO 建築文化のカタログ都市』京都建築倶楽部, 淡交社, 平成元年 10 月 20 日, p.38
- 20) 「窓の博物誌 6 インペリアル窓」水野信太郎, 『TOSTEM View Good Living』MAY 1988 臨時増刊号 Vol.10 昭和 63 年 5 月 25 日 (通巻第 106 号), トーヨーサッシぐっどリびんぐ係編集, クー出版工房発行, p.8
- 21) 前掲『近代建築史 国際環境における日本近代建築の史的考察』p.133
- 22) 『日本の建築 [明治大正昭和] 8 様式美の挽歌』伊藤三千雄+前野 堯, 三省堂, 昭和 57 年 8 月 10 日, p.140
- 23) 「近代主義建築の影響」藤岡洋保, 『ビジュアル版日本の技術 100 年 第 6 巻 建築 土木』村松貞次郎・高橋裕, 筑摩書房, 1989 年 6 月 10 日, p.84